

金町の雲の峰

—「葉」創刊三周年によせて—

松岡隆子

私たちの「葉」は去る四月に創刊三周年を迎えました。これを機に、皆様の総意の許主宰に就任することとなり、新たな一步を踏み出してまいりました。四月二十四日には記念の集いが催される予定でしたが、新型コロナウイルス感染症の感染予防のため止む無く延期することになりました。四月七日に発令された緊急事態宣言は解除されたものの収束の見通しが立たない現状で、その後の予定が立てられません。でも必ずその日は来ると信じて楽しく集い合える日を待ちたいと思います。

予定通り三周年記念号として本号をお届けできることは嬉しい限りです。本来ならば改めてご挨拶をすべきところですが、四月号の主宰就任の挨拶を以て代えさせていただきます、本号では創刊に関するある日の出来事をお話しさせていただくことに致します。

「朝」終刊という岡本陣先生のご英断が知らされたのは平成二十八年の六月でした。その衝撃の中から立ち上がって新結社を発足した経緯については、創刊一年後の「葉」誌に記しましたが、ここでは代表という大役を受ける決断に至ったある事に触れておきたいと思います。

終刊の十二月までには半年しかありません。八月二十日の同人役員会はタイムリミットでした。その前日、思い余って同人会会長の青山丈さんを訪ね、新結社の主宰をお願いしました。青山さんが主宰になって下されば皆さんも安心してついて来て下さると思つたからです。でも、それは年齢的に無理だと即座に断られました。そして青山さんは私を金町に連れて行つて下さいました。金町団地の十五階でエレベーターを降りて懐かしいドアの前に暫く佇んでいました。青山さんの声に促されて後ろを振り返つた時見えたのは、青空に燦然と耀く雲の峰でした。(雲の峰一人の家を一人発ち)——先生は一人で「朝」という立派な家を築かれ私たち大勢の門人を育てて下さつたのだと思うと胸が一杯になりました。先生の志を誰かが後継しなくてはならないと強く思いました。前後しますが、駅を出て先生のお宅に行く途中、石原照子さんと横川信子さんにはつたり出会いました。お二人は先生のお宅の郵便物などの整理に行かれ帰られるところでした。お二人の声に先生のお声が重なりました。少し時間がずれていたら、別な道を歩いていたら、と思うと、その偶然は奇跡のように思えました。

岡本眸先生の主宰誌「朝」を後継すると言うことは並大抵のことではありません。でも師恩に報いるには誰かが継承していかなくてはなりません。あの日の雲の峰の耀きと、そこへ導いて下さつた青山丈さんの思いと、お二人の姪御さんとの運命的な出会いに、大きく背中を押されての立出でした。代表から主宰へと更なる重責を負うことになりましたが、皆さまと共に一生懸命勉強してまいります。